

松村善四郎先生を偲ぶ

—協同組合の理論構築に生涯を捧げて— 中川 雄一郎（明治大学教授）

1996年2月12日午後5時、私の恩師、明治大学名誉教授・松村善四郎先生が永眠されました。享年81歳でした。先生は、2年程前に体調を崩し、そのため何度か入退院をしておりましたが、同日風邪から肺炎を併発し、帰らぬ人となりました。

私は、翌13日—この日は明治大学の最初の入学試験日でした—の朝早く、大学でこの悲報に接しました。私にとっては人生でもっとも悲しい朝になってしまいましたが、気を取り直して、生前先生が親しく交際されておりました明治大学の友人、知人の方々にこの悲報をお伝えすると同時に、広報部やその他大学のいくつかの部署と連絡をとりあい、大学としての対応をお願いしました。

先生の生きた時代背景を顧みますと、その前半は、軍国主義思想が国民の生活全般に次第に浸透していき、遂に無謀な太平洋戦争に突入り、敗戦をむかえる、というものであったろう、と思います。先生は「15年戦争」について余り多くを語らなかったようですが、先生が「士官学校」を経て「陸軍大学」を卒業されたことは耳にしたことがあります。

後半部分は、戦後の民主化過程と、中国政府の樹立や朝鮮戦争を契機とする「後戻り」＝「反共の砦」、それに60年安保闘争後の長期にわたる高度経済成長、大学教育の大衆化＝マスプロ教育と大学紛争、「日本の経済大国化」＝「豊かさとは何か」などに代表される「政治と経済」の時代背景であった、と思われまふ。この後半部分のうち60年安保闘争後の「政治と経済」は、私が記憶し理解している状況と重なります。もっとも、大学紛争については、松村先生は教師の立場から、私は学生としての立場からその紛争を理解しているので、完全にぴったり重なるとは限らないとは思いますが。

私はまた、先生は、中国侵略の反省から、軍国の過去を清算し、明治大学政経学部Ⅱ部に入学し

直して、人生の新たな道を追求された、と聞いております。明治大学の助手に就任されたとき、先生は既に40歳になられていたそうですが、学問研究に身を投じようとの決意は、軍国主義に対する反省と戦争の民主化闘争への貢献、という決意を軌を一にされていた、と私は思っています。1950年代に中国共産党機関紙「紅旗」に全文掲載された論文「合作社について」はその典型的な事例の一つですが、それをも含めて、以後今日まで先生は協同組合の理論の構築に取り組んできました。

先生の「協同組合の理論」の特徴は、「協同組合の主体は組織であり、機能は闘争である」、とする「協同組合の本質」論がその基礎になっていることです。「主体は機能によって規定される。協同組合の組織は協同組合であるのは闘争しているからにはかならない。経済闘争という手段を通じて、組合員の経済的地位を改善するという目的の達成をはかる組織が協同組合である。協同組合はかかる生きた組織なのである。だが、協同組合にとって、闘争は手段であるとはいえ、この闘争こそが協同組合を規定するのであり、協同組合の本質構成上決定的な地位を占めている」（「協同組合論」未来社）。そしてこの本質論から、協同組合の「組織」と協同組合の「企業」との関係が規定されていく。「協同組合と協同組合企業との関係は、主体と機能（手段）との関係であり」、協同組合の「目的と地位」という点から両者は質的に異なっており、「企業」は「組織」の支配下に置かなければならないのである。

この「松村理論」は、今日のわが国内外の経済・政治・社会・文化の状況を踏まえまふと、今でもなお重要な理論上の問題提起を行っているように思われまふ。労働者協同組合運動を展望する場合にも、かかる「本質」を考え、企業としての協同組合を正確に捉える場合にも、私たちは「松村理論」から多くを学ぶことができるのです。合掌。